



歩道から見たしだれ桜並木。根元に竹チップが敷かれています

竹の有効活用をしています

竹チップを徳山しだれ桜保護に役立てる

数年前から竹チップの製造に取り組んでいる徳山建設株式会社では、このほど徳山区町営サッカー場横のしだれ桜並木沿いに竹チップを敷く作業を実施しました。これは同社の地域貢献の一環として実施されたもの。敷いた竹チップは6㎡。竹チップを敷くことで①土壌が乾燥するのを防ぐ②温度をある程度一定に保つ③雑草が生えにくくなるなどの効果（マルチング効果）があり、敷いた竹チップは数年で土に戻るということです。

同社鈴木淳二社長は「以前から、竹チップを用いた地域貢献ができないかと考えていました。徳山区はしだれ桜の名所として有名な地区。桜の保護に竹チップを使えないかと思ったんです。今回、徳山区役員の皆さんと話し合い、敷設作業にご理解いただきました。今後、しだれ桜の生育にどのような影響があるか観察していきたいと思います。同時に、ほかの場所でも必要があれば敷設作業を施していきたいと考えています」と話していました。

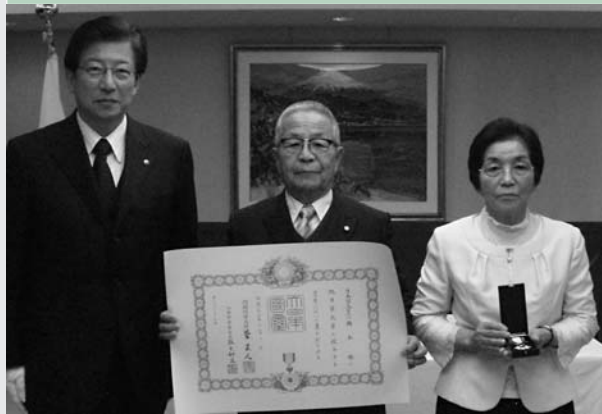
ピンク色の花があでやかなしだれ桜。皆さん、見に行った際には、その根元にも注目してみてください。

この町に起こった
新鮮な「ネタ」を皆さんの元へ。
この次に登場するのは
あなたかも!?

橋本務さんに旭日単光章

元中川根町議会議員の橋本務さんに旭日単光章が授与され3月24日、静岡県庁で川勝県知事から本人に伝達されました。

橋本さんは昭和30年4月、徳山村議会議員に当選して以来、通算13年11カ月の長きにわたり在職。その間、中川根町議会副議長、中川根町国民健康保険運営協議会委員、中川根町教育委員を歴任するなど、強い信念と実行力、決断力をもって町政に心血を注ぎ、地方自治の進展や住民福祉の向上に貢献を果たしました。橋本さんはその功績が認められての受章となりました。



故 芹澤久雄さんに正六位

1月23日にご逝去された元本川根町立学校長の芹澤久雄さんに対し、位階（正六位）が授与され3月、位記がご家族へ伝達されました。

芹澤さんは、昭和14年3月、榛原郡家山尋常高等小学校で教職生活を始め、昭和54年3月に本川根町立本川根中学校で退職を迎えました。誠実・温厚な人柄。児童生徒には愛情を持って接し、優れた識見と卓越した指導力で教育実践を進め、常に教育のあるべき姿を追求し、教育の振興に多大な功績を残されました。このほど、その功績が認められ受章となりました。



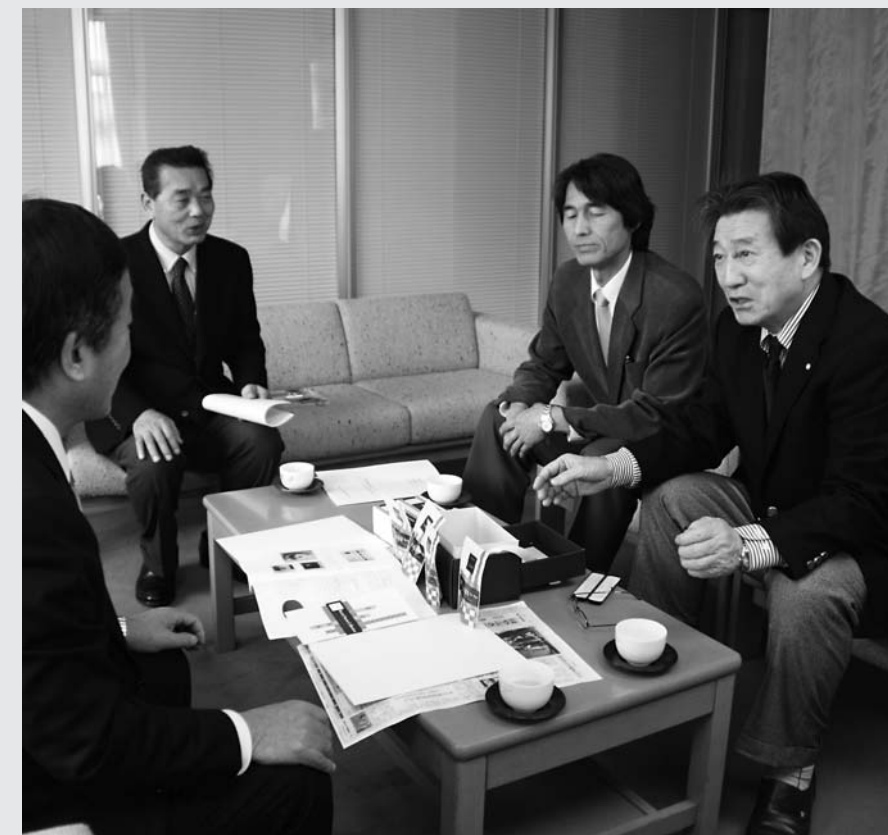
川根茶の新しい可能性を追求

商工会などがフレーバーティーを開発

本町と島田市の両商工会では昨年、地元産果実などの香りを楽しめるフレーバーティーを開発しました。完成した商品は、川根茶にブルーベリー、ゆず、梅、バラの香りを取り込んだ4種類。地元の農業者、観光業者、商工業者などが2年がかりで取り組みました。

同商品のPRのため3月17日、本町商工会関係者が佐藤町長を訪問しました。菊池松巳会長は「この商品のターゲットは30歳代くらいの女性たちです。従来の川根茶とはまた違った魅力で、新たな顧客を開拓したいと考えています。この商品が、消費者にとって『川根茶』を知る一つのきっかけになれば、今後、どのように販路を開拓していくか、そこが最も重要です。さまざまな場面でPRしていきたいと考えています。どの分野も厳しい時代を迎えています。商工会は今後も、新しい可能性を追求していきたいと考えています」と話しました。

それを受け佐藤町長は「こういった新しい取り組みは町としても大変興味深い。ほかにも『私たちも何かをやってみよう』という人が出てくれば、町全体の底上げにもなります。今後も商工会の取り組みを応援していきたい」と話していました。



商工会菊池松巳会長が、佐藤町長にフレーバーティーの特色などを説明

心も体も温まってください

被災者の思い茶業組合に届き支援実現

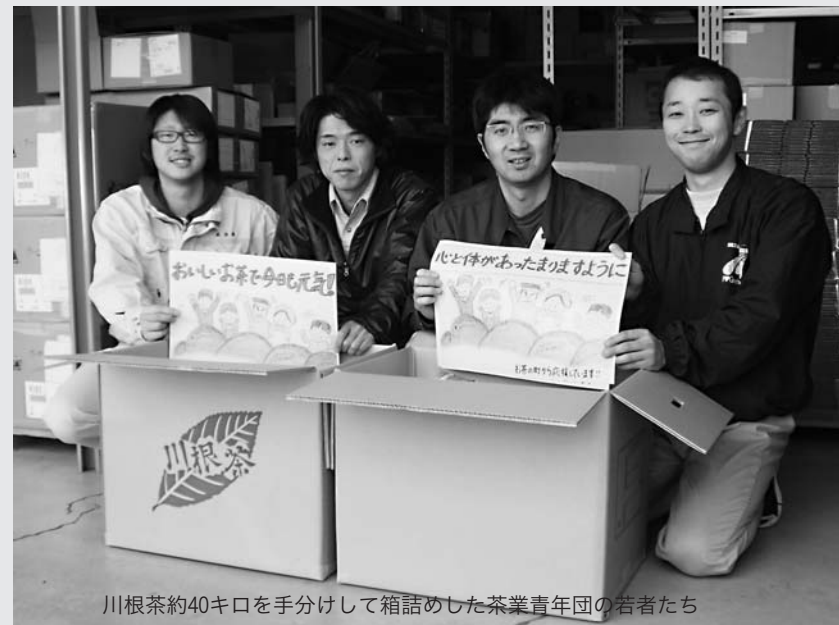
川根茶業協同組合（以下茶業組合）では、東日本大震災の被災地である福島県いわき市に、支援物資として川根茶約40キログラムを送りました。

これは同市でボランティア活動をしているホールアース自然学校（富士宮市）の山川勇一郎さんから発端となり依頼があったもの。いわき市常磐湯本町には、沿岸部で被害に遭った約800人が避難所生活を送っています。被災者の「おいしいお茶を飲んで温まりたい」「お茶を飲むことで日常生活を一日も早く取り戻したい」という思いが、人づてに茶業組合に伝わり、今回の支援が実現しました。

茶業組合では急ぎよ、組合員に川根茶の提供を募ったところ、39の茶販売店から約40キロ（200グラム入り）の川根茶が集まりました。この川根茶は3月29日、茶業青年団の若者4人の手で「心と体をあたためてください」と書かれたシールが貼られ、丁寧に箱詰めされました。このお茶はホールアースや地元の人たちが実施する炊き出しで振る舞ったり、自宅で待機している人に配布する見通しのことです。

茶業組合山下譲理事長は「震災で被害を受けた人たちは、ストレスと不安を抱えながら毎日を過ごしていると思います。川根茶を飲んで、少しでも心を癒してくれたらうれしい」と話していました。

Topics



川根茶約40キロを手分けして箱詰めした茶業青年団の若者たち



山川勇一郎さんから「いただいたお茶は現地で大好評です。炊き出しならぬ「お茶だし」を各地で展開しています。お茶は避難所でもコミュニケーションのよい触媒になっています」とメールが届きました。下の写真は現地の模様です。

川根本町のまちの話題